

嫌われ者の俺はやり直しの世界で
義弟達にごまをする

Others

ライル

シャルルの叔父。
一度目の世界では
孤独なシャルルに
手を差し伸べたが……？

マリアンヌ

メイド商会の女性。
一度目の人生では、
シャルルの妻だった。

マツ

ウォールマン侯爵領に
ある村、
アインテルの村長の息子。

the

Wahlman Brothers

ジェイド

母の再婚でウォールマン家の
一員になった。シャルルの義弟。
家族思いで、時には
手段を選ばないところがある。

リエン

ジェイドの弟。
兄とともにシャルルの義弟となった。
甘えん坊だが、腹黒な一面も。

シャルル

ウォールマン侯爵家の長男。
身勝手だった一度目の人生を反省し、
やり直しの世界では
義弟を大事にしている。
過去の失敗から、自分に自信がない。

プロローグ 一度目の人生

母が死んで一年が過ぎた頃。

綺麗な女性と幼い男の子二人が、父に連れられてやってきた。

「シャルル。彼女が今日からお前の母になるフロルだよ。そして、この二人は今日からお前の弟になるジェイドとリエンだ」

父は幸せそうに微笑みながら俺にそう告げ、隣に立つ継母継母はと義弟たちも同じような笑顔を見せる。義弟たちは不安の入り混じった表情をしていたが、そのアメジスト色の瞳は新しい生活に期待するように輝いていた。

希望に満ちた彼らを見ていると俺一人がのけ者にされたようで、苛立ちいらだにぎゅっと拳を握る。

父が再婚するという話は、母の死を受け入れられない十歳の俺には到底理解できなかった。

——父様は母様のことを忘れてしまったの？ もう母様のことは愛していないの？

——俺は父様がいてくれるだけでいいのに、父様は俺だけじゃダメなの？

嬉しそうな父の顔を見ていると『裏切られた』と感じ、同時に俺から父を奪いうば幸せそうにしている継母継母はと義弟たちを、心の底から憎らしいと思った。

——許さない。絶対に許さない。

——父様を奪^{うば}うやつらなんて……いらないんだ！

それから俺は、継母^{継母はは}と義弟たちに辛くあたるようになった。

子爵家出身の彼らを『侯爵家の地位目当ての卑^{いや}しいやつら』と罵倒^{ばとう}した。

冷たい態度をとり、話しかけられても無視した。

ジェイドとリエンは必死に俺に話しかけ、機嫌を取ろうとしてきたが、俺は彼らの大切な物を捨て、服を汚し、切り裂いた。そうして『お前たちにはそのほうがお似合いだ』などとひどい言葉や行為を重ねていけば、次第に寄りつかなくなる。

継母^{継母はは}はそんな俺にも優しく接したが、俺は反発するばかりだった。

ジェイドとリエンは俺を避けるように生活し、部屋にこもることが多くなった。俺と目が合うと二人して怯^{おび}えたようにアメジスト色の瞳を揺らしていた。

父は俺に何度も注意したが、『母様のことを忘れ、裏切ったのは父様だ！』と言うと口をつぐむ。

——俺は悪くない。悪いのは母様を裏切った父様や、この家に勝手にやってきたあいづらのほうだ。

俺は呪いのように、自分は悪くないと言い聞かせた。

そうして五年も過ぎた頃、継母^{継母はは}の持病が悪化した。起きている時間が少なくなり、ほとんどをベッドで過ごすようになっていた。

見かねた父が、王都にいる医師に診^みてもらおうと提案し、二人は王都へ向かうことになった。
あんな女など放^{はな}つておけばいいのに……

そんなことを思いながら、一人で立つことすらままならない継母^{継母はは}と父を見送る。ジェイドとリエンも来ていたが、俺がいるせいかうしろのほうで隠れるように見送っていた。

父は継母^{継母はは}を馬車へ乗せると、俺のところに来てボンと頭を撫^なでる。

「シャルル。留守の間、弟たちを頼むぞ」

「……わかりました」

父は俺の返事に嬉しそうに微笑み、馬車へ乗り込んだ。

——父様の帰りはいつになるんだろう。早く帰ってきてほしいな。

そんなことを思いながら、俺は父の帰りを待っていた。

けれど、父との別れは唐突に訪れた。

王都へ向かっていた二人は、道中で野盗^{おど}に襲われ、殺されたのだ。

父は継母^{継母はは}を庇^{かば}うように抱きしめ、継母^{継母はは}はそんな父にしがみついたまま最期を迎えたと聞かされた。

目の前が真っ暗になった。

父の死を受け入れられるはずがなく、放心する俺の横で一緒に話を聞いていたジェイドとリエンは、自分たちの母が死んだことにショックを受けていた。

ジェイドは涙を堪^{こら}えるように唇を噛み締め、リエンは声を上げて泣きじゃくる。

二人の姿を見て、俺は苛^{いら}立^だつてしようがなかった。

父の命を奪ったのは野盗だが、そもそも継母の治療など行かなければ、父まで死ぬことはなかった。いや、継母や義弟たちがこの家に来たことがすべての元凶だ。あの三人のせいで父は死んだんだ。

——あいつらのせいで。

気づけば俺はドス黒い感情に呑み込まれていた。

その矛先が向いたのは、ジェイドとリエンだった。

雪が降る寒空の下、まだ幼い二人を、俺は屋敷から追い出した。

「シャルル兄さん……。そんな、どうして！ 私たちはなにも……」

「うるさいうるさいっ！ 父様を殺した女の子は出ていけ！ お前たちが来なければ父様は死ななかった！ 全部、全部全部、お前たちが悪いんだ！」

その時の怯えるような顔は、今でも忘れられない。

リエンは恐怖と寒さに震えてジェイドにしがみつき、ジェイドはそんなリエンを庇うように抱きしめる。二人のアメジスト色の瞳は、恐怖と絶望に染まっていた。

まるで俺を悪者のように見つめる瞳に苛立ちながら、屋敷の門を閉じる。

「兄さん！ お願います！ 私たちの話を聞いてください！ シャルル兄さん！」

門の向こうで助けを乞う二人の声が響き渡った。

負の感情に囚われた当時の俺が、自分がしたことの重大さに気づくことはなかった……。それから十五歳になった俺は父の後を継ぎ、領主として働きはじめた。

仕事の忙しさから、追い出した義弟たちのことなど気にする暇もなく、あつという間に一年が経った。

冬になり、ちらちらと降りはじめた雪を見ると、最後に見たジェイドとリエンの顔が脳裏をよぎる。

今思えば、あの時のことはやりすぎではないかと思うが、頭を振ってその考えを振り払う。

「俺は悪くない。俺は悪くないんだ……」

罪悪感から逃れるように何度も自分に言い聞かせ、俺は過去から目をそらした。

領主の仕事をこなしていくほどに、父の偉大さを痛感する。仕事についてはほとんど教わっていなかったため、自分が行っていることが正解なのかわからない。

領地の視察に行けば領民たちに意見や相談事を投げかけられ、解決策を求められても「あとで対策を考えます」と、答えを先延ばしにすることしかできなかった。

次第に領民たちからは不満の声が上がり、父と比べられ『期待外れ』と言われるようになる。

そんなこと、自分が一番わかっている。けれど、今の自分ではこれが精一杯だ。

身近に相談する相手もおらず悩んでいた時、ある人が俺に手を差し伸べてくれた。それは、亡くなった母の弟であるライル叔父さんだった。

叔父は「シャルル。困っていることはないか？」といつも気かけ、苦しむ俺を救ってくれた。派手な格好で、明るく俺を励ましてくれる優しい叔父。自身が経営する事業もあり、忙しいはずなのに。

それに、領主の仕事に追われる俺の代わりに領地の金銭管理まで請け負ってくれることになり、俺は叔父に感謝してもしきれなかった。

「叔父様。なにからなにまですみません」

「気にするな、シャルル。俺たちは血が繋がったかけがえのない家族なんだ。家族同士、困った時はお互い様だろう？」

叔父はニカツと笑い、俺の頭を撫でる。

辛くなった時には叔父の言葉を思い出し、なんとか領主としての仕事をこなしていった。

天災なども重なり、領地の経営は不安定だったが、自分なりに領主としての勤めを果たす日々。

三年も経てば、初めの頃より仕事はできるようになった。

だがいまだに余裕はなく、父のようにはいかない。

そんな時、公爵家から舞踏会への招待状が届いた。

「舞踏会か……」

仕事に追われ、夜会などは叔父に任せっきりだったけれど、領主として少しずつ社交の場にも出ていかないといけないだろう。こういう場で生まれる縁は大切だと叔父が言っていたのを思い出し、俺は舞踏会へ足を運ぶことにした。

そして、運命の女性と出会った。

煌びやかなパーティの会場。その壁際に佇む一人の女性がいた。薄茶色の可愛らしい瞳と目が合うと、彼女は花が咲いたような笑顔で俺に笑いかける。ダンスに誘い、水色のドレスを揺らして楽

しそうに踊るその子に、俺は一目惚れしたのだった。

曲が終わると互いに小さく会釈し、俺は彼女に話しかける。

「あの、私はシャルル・ウォールマンと申します。貴方は？」

「はっ！ ごめんなさい、私ったら名乗らずに。私はマリアンヌ。マリアンヌ・メイデルです」

こうして俺たちは出会った。

それから手紙のやりとりを重ねて徐々に仲を深め、やがて恋人になる。マリアンヌは明るくて笑顔の似合う素敵な女性だった。ダンスが大好きで、俺はいつも練習相手をさせられた。

そして二十歳を迎えた俺たちは、永遠の愛を誓って夫婦となった。

マリアンヌは妻として俺を支え、いつも励ましてくれた。領主の大変さも理解してくれて、精神的にも支えてくれた。二人で手を取り合い、幸せを築いていく……そのはずだったのだが、領地の経営が傾くにつれて、徐々に折り合いが悪くなっていった。

天候不順が続き、生活が苦しくなった領民たちから地代を下げてほしいという嘆願書が毎日のように届く。

必死に資金をかき集め、マリアンヌの実家にも泣きついて援助してもらった。それでも事態は解決せず、積み重なる嘆願書と領民の非難の声に耐えきれず、俺は酒に溺れるようになった。

そんな俺にマリアンヌは愛想を尽かし、俺たちの結婚生活は五年で終わりを迎えた……

それからの人生は転げ落ちるようだった。

領地経営の立て直しのために、勧められるがまま参入した鉦山事業に失敗し、膨れ上がる借金。もはや返済など不可能で、屋敷は差し押さえられ、父や母との思い出もすべて失った。領主としての名も地に落ち、領民にすら愛想をつかされた。

三十歳を迎えた頃には、ウォールマン家の名は『嫌われ者』の代名詞となっていた。

侯爵家としての威厳はすでになく、俺自身も日々を生きるので精一杯だった。住む場所も失くし、今では誰も使用していない納屋に身を置いている。

「父様が今の俺を見たら、失望するだろうな」

納屋の窓から見える寒空を見上げながら、ポツリと呟いた。

冬が訪れると、父を思い出す。その度に家を守れなかった自分の不甲斐なさに落胆する。

父の命日の日。重い足取りで墓地へ向かう。墓地へ到着すると、父が死んだと告げられた日のように雪が降り出した。

父はきつと怒っているだろう。こんなみすばらしい俺のことを。

花を買う余裕もない俺は、道端に咲いていた花を摘み、墓の前に供える。

毎年、墓標の前で領主としての悩みや喜びを父に報告していたが、今の俺は謝ることしかできない。

「父様。侯爵家を守れず、すみません……」

しんと降り続ける雪の中、墓標の前でかがみ込んでいるとこちらに近づく足音に気づいた。

振り向くと、そこには見覚えのあるアメジストの瞳をもった二人の男性が立っていた。

「ジェイド……リエン……」

俺は思わず義弟たちの名前を呼んだ。名前を呼ばれた義弟——ジェイドは冷めた視線をこちらに向け、リエンはクスクスと笑い声を上げる。

「どこの浮浪者かと思ったら、シャルル兄さんでしたか」

ジェイドの物言いに怒りを覚えるが、今の自分は『浮浪者』と見られても仕方のない状態だった。しばらく新調していない服はくたびれ、髪は伸びたまま……

それに比べて目の前の二人は高価な服を身にまとい、洗練された出で立ちだ。どちらが貴族らしいかと問われれば、誰もが彼らを指さすだろう。二人は俺をまじまじと見て、口元をほころばせる。

「ふふ。シャルル兄様どうしたんですか？ 黙ってしまつて。ほら、昔のように僕たちに罵声を浴びせるところですよ？ 『お前たちみたいな卑しい人間が俺に話しかけるな！』 ってね」

俺の目線に合わせるようにかがんだリエンが挑発してくるが、反論する気力さえ今の俺にはない。うつむく俺を見て、リエンは面白くなさそうに立ち上がった。

ジェイドは立派な花束を俺が置いた花の上に置くと、墓標に向かって目を閉じ、手を合わせる。

「兄さん。領地の経営に困っているようですね」

「なんでそれを……」

「その格好を見れば一目瞭然ですよ。それにもつぱらの噂ですからね。侯爵のせいで領内は滅茶苦茶だと」

返す言葉もなく、俺はうつむいたまま顔を上げられなかった。

「借金、肩代わりして差し上げましょうか」
「……えっ？」

突然の申し出に驚き、伏せていた顔を上げると、そこには微笑みを浮かべるジェイドの顔があった。

義弟たちを放り出してから、彼らのことはなにも知らない……だが今の二人を見れば、裕福な生活をしているのがわかる。

「大切な父上の領地ですからね。義理とはいえ、息子の私が守るのは当たり前でしょう」

「ほ、本当にいいのか？ 相当な金額なんだぞ……？」

「ええ、大丈夫ですよ」

まさかジェイドが助けてくれるなんて……。あんなにひどいことをしたのに。

申し訳なさど感謝でいっぱいになった俺は、年甲斐もなく泣いてしまう。

「兄様。泣いてないで誓ってよ、僕たちに」

「誓う？ 誓約書を書けばいいのか？」

「そんな紙切れなんていらないよ。僕たちが欲しいのはシャルル兄様の誠意。僕たちの下僕になりますってね。ほら、僕の足にキスして」

そう言ってリエンは俺の目の前に足を差し出してくる。

俺は意味がわからずにオロオロしていると、リエンは不機嫌そうに足を踏み鳴らした。

「ねえ、言ってる意味わからないの？ 早くしろって。借金返すの、やっぱりやめちゃおうか？」

「や、やるっ！」

俺は顔を振り、雪が積もりだした地面に膝をついてリエンの綺麗な靴にキスをする。

ジェイドにも同じようにしなくてはと思い近づくと、足を遠ざけられてしまった。

「汚らしいやつだ。プライドもないのか」

ジェイドは俺のことを汚いものを見るように睨みつけていた。

「あはは。シャルル兄様かわいそう」

リエンは愉快そうに笑いながら俺たちのことを見ていた。

馬鹿にされ、悔しくないわけがないが、あの多額の借金を肩代わりしてくれるのならそれでいい。それで領地が、領民たちが助かるならば。

「では、侯爵家が背負った借金は私が支払っておきます。ですが、兄さん個人の借金はきちんとご自分で払ってくださいね」

俺……個人の借金？

言われたことの意味がわからず呆然していると、ジェイドが呆れた顔をする。

「兄さんがした、鉱山事業の借金ですよ」

「あ、あれは領地の経営を立て直すためにしたものだ！ 俺の借金じゃない！」

「なにを言っているんですか、兄さん？ 兄さんの名前で契約したんですよ？」

「確かに俺の名前で契約した。だが、すべては領地のことを思っ……」

「それって本当かなあ？ 領地のためになんて言いながら、儲けが出たら自分の懐に入れるつも

りだったんじゃないの？ だから個人名義で借用書にサインしたんでしょ？ それなのに負債は領地の借金だなんて都合がよすぎない？」

「あの時は、そうするように言われて……それで仕方なく……」

本当のことを話しているのだが、出てくる言葉は言い訳にしか聞こえない。

「本当に、俺は領地を救おうと思ってやってきたんだ。本当なんだ、信じてくれ」

焦った俺は助けを乞うようにジェイドにしがみつくが、ジェイドは汚らしいとばかりに俺の手を払う。

「私たちが今のシャルル兄さんのように助けを求めた時……兄さんはどうしました？」

「え……？」

「あれ？ 十五年も前のことなんて忘れちゃった？ 僕たちは昨日のことのように覚えてるよ。シャルル兄様が僕たちを地獄へ突き落とした時のこと」

思い出さないようにしていた、十五年前の記憶。

あの時の俺は怒りに任せてジェイドたちを突き放し、屋敷から追い出した。

「俺は……俺は……お前たちを……」

「思い出してくれたようでよかったです」

「あ、あの時は、すま……」

「ですが、謝罪の言葉などはいりませんよ、兄さん」

なぜか俺に優しく微笑みかけるジェイド。

その微笑みの意味がよくわからないが、俺の過ちを許してくれるということなのか？

「あ！ 勘違いしちゃダメだよシャルル兄様。僕たちは、兄様を許してなんかいないからね」

「そうですね、兄さん。私たちが貴方を許すことなど……死んでもありません」

「それじゃあ俺は……」

「そうだねえ、てつとり早く返済するには、奴隷として働くのがいいんじゃないかな？ というか、

シャルル兄様はもう奴隷として売られることが決まってるんだけどね」

「ど……れい……？」

その言葉に、ぶるりと体が震える。

訳がわからず二人を見上げると、彼らは愉快そうに口元をほころばせていた。

「素人が安易に鉱山事業などに手を出すからこうなるんですよ。それに、相手が信用できるのか見定めないといけませんね」

ジェイドは胸の内ポケットから一枚の紙を取り出す。

見覚えのあるその紙は、俺が鉱山事業に参入する際に書いた契約書だった。

「なぜそれを……」

「なぜって、シャルル兄さんに紹介した鉱山事業を扱っているのは、私が経営する商会ですから。まさか、あんなに簡単に乗っくとは思いませんでした。うまい話には裏があると言うでしゅう？」

「人を簡単に信用しちゃダメなんですよ、兄様」

つまり俺は、ジェイドとリエンに騙だまされていたのか？

二人の言葉が理解できず、頭を抱えるようにうつむくと、頭上にはおかしそうに笑う二人の声が響く。

「シャルル兄さん。貴方あなたも私たちと同じように、ドン底を経験するといいですよ。地獄はまだまだはじまったばかりですからね」

「奴隷どれいになつても元気でねえ、シャルル兄様」

恐る恐る顔を上げると、ニコリと笑いながら俺を見下ろす義弟たちと目が合う。その笑顔に似つかわしくないほど、二人のアメジスト色の瞳は憎悪で濁にごっていた……

それから爵位を奪うばわれた俺はジェイドたちにより奴隷商に売られた。奴隷どれいとして鉱山に放り込まれ、本当の地獄がはじまった。

強制労働を強いられ、慣れない重労働で動けなくなればムチで打たれ、体中が腫はれ上がる。食事もまともに与えられず、地べたで眠る毎日。永遠に続く地獄の中で肉体的にも精神的にも限界を迎えた俺は体調を崩くずし、あつという間に立つこともできないほど衰弱すいじやくした。

そうなれば、湿った地面の上で惨めみじに死を待つばかりだった。

助けてくれる者など誰もいない。

ああ、俺はこんな場所で最期を迎えるのか……

だが、これは今までの俺の行いが招いた結果だ。

すべて俺が悪いんだ。

死ぬ間際になり、俺はようやく自分の行いを悔くいた。

もし、継母ままははや義弟たちが来た時に反抗せずに優しくできていれば……

もし、継母ままははと父が王都に行くのを止めていたら……

もし、ジェイドとリエンを追い出さなければ……

もし、俺が領主にならなければ……

後悔ばかりの人生が、走馬灯のように頭を駆け巡る。

「神様、ごめんなさい……。みんなに……ジェイドとリエンに、ひどいことをしてごめんなさい……。ごめんなさい……。ごめんなさい……。ごめ……。ごめ……。ごめ……」

あの時二人に言えなかった言葉を何度も何度も呟つぶやき、俺は一人寂しく最期を迎えた……はずだった。

第一章 二度目の人生のはじまり

死んだと思ったあとのことは、よく覚えていない。

懐かしい匂いと温もりに包まれて、俺は目を覚ます。

見覚えのある天井……

ぼんやりとした意識のまま周りを見渡すと、そこには懐かしい光景が広がっていた。

「俺の……部屋……？」

夢かと思った俺は、のそりと起き上がって辺りを見渡す。小さな頃に大事にしていた玩具やぬいぐるみが並び、壁には母の肖像画が飾ってあった。

これは一体……どうしたことなんだろう……？

昔の夢を見ているのだろうか？

それにしてもやけに現実的で、匂いまでする。

ベッドから起き上がってみると、視点が低くなっていることに気づいた。

「まさか……」

急いで部屋にある姿見に向かい、全身を確認すると……

「嘘……だろ」

鏡に映っていたのは、十歳の自分の姿だった。

目の前のそれが信じられず、ぺたぺたと自分の顔に触れて確認する。頬をつねってみると、痛みを感じた。

「夢じゃ……ない？ 本当に夢じゃないのか!？」

パニックになり、鏡の前でウロウロと落ち着きなく歩きまわる。

一体どうなっているんだ!？」

俺は奴隷に落とされ死んだはずなのに、また幼い頃に戻っているのか？

意味がわからない。なんでこんなことが起こって……

「あああ!」

辺りをキョロキョロと見渡し、壁に飾られた母の肖像画に目を留めると、俺はあることを思い出す。

この肖像画を飾ったのは、父が再婚すると聞かされた日の前日だ。

肖像画が飾ってあることは、もう継母と義弟たちがこの屋敷にいるのか？

——俺、初めて会った時に三人に向かって『お前たちと家族になどならない!』と暴言を吐いてしまったんだ……

幼い自分の言動を思い返すと、罪悪感で押しつぶされそうになる。

これが現実でも夢でも、神様が最後のチャンスくれたのかもしれない。三人に謝っておけと……

自分に都合よく考えてしまうが、今の俺にできることはそれくらいしかない。

「謝るなら……早いほうがいいよな……」

急いで着替えをすませ、足早に部屋を出る。

「まずは、^{あのひと}継母に謝りに行こう。それから、ジェイドとリエンにも」

父と^{まはは}継母が使用していた部屋の前に立ち、大きく深呼吸をして扉をノックする。

「はい」と父の声が聞こえてきて、懐かしさと嬉しさが込み上げてくる。

「父様……、シャルルです」

「シャルルか、入っていいぞ」

ゆっくり扉を開けると、父の姿が目に入った。

ずっと会いたくて仕方なかった父の姿を見ると、我慢しきれず貴族の子供としての^{つひ}慎みも忘れて抱きついてしまう。そんな俺に、父は驚いた様子だった。

「っ!? シャルルどうしたんだ？ なにがあったんだ？」

「ごめんなさい……父様」

「なにか謝らないといけないことをしたのか？ 落ち着いてからでいいから、話してみなさい」

父は俺の頭を撫でてくれた。その手の温もりを感じると、本当に生きているんだと実感する。

俺は何度か深呼吸して話を始めた。

「あの……フロルさんは、今どこにいるのですか？」

「フロル……!? どうしてそのことを……」

^{まはは}継母の名前を出すと、父は気まずそうに視線をそらす。

「もしかして、まだ来ていないのですか？」

「ああ、三人の到着は明日の予定だ。本当は今日話そうと思っていたんだが、先に知ってしまったようだな……」

どうやら俺は、あの三人が来る直前に戻ってきたらしい。

父はあの日と同じように、俺に再婚の件について話しはじめた。

「本当は、もっと早く伝えようと思っていたんだが、エメットのことを大切に思うお前を見ていると、言い出せなかった。すまない、シャルル。私はフロルという方と再婚することにしたんだ。私は仕事が忙しく、お前のそばにいてやれないことが多いだろう。だから新しい家族ができれば、シャルルが寂しくないだろうと思ってな……。もちろん彼女のことは愛しているぞ。それにな、新しくやってくる弟たちもすごく可愛くて、優しい良い子たちなんだ」

父は申し訳なさそうな顔をしたり、照れたりと、表情をコロコロ変えながら話す。

一度目の俺はこの話を聞いたあと、父に反抗して部屋を出ていった。

だが、今回俺が出す答えは違う。

「……はい。父様の気持ちはわかりました。俺は父様の再婚を応援します」

「そ、そうか！ シャルル、ありがとう」

父は嬉しそうに微笑むと、俺をギュッと抱きしめる。父の腕の中で、俺はずっと心の隅に引っかかっていたことを思い切って父に聞いてみた。

「あの、父様。その……母様のことは、もう愛していないのですか？」

俺の言葉に父は微笑み、ゆっくりと顔を横に振る。

「エメットのことは、ずっと愛しているよ」

「そうですか……」

父のその一言で、長年心の中で渦巻いていたモヤモヤが晴れていく。

今度は俺から父に抱きつくと、父もまた、俺を優しく抱き寄せてくれた。

次の日。

もう一度目のような失敗はしないように、三人を乗せた馬車を父とともに玄関で待つことにした。父はいつもより上等な服を着て、俺もなるべく三人に好感を持つてもらえるようにしっかりと身支度を整えた。

「シャルル、気合が入っているな」

「父様こそ」

互いの格好を見ながらそんなことを話していると、馬車が到着した。

扉が開き、三人が降りてくる。

艶やかなブラウンの髪と透き通った碧眼の美しい女性。この人が俺の継母になるフロルさん。

彼女と同じブラウンの髪をひとつにまとめ、緊張した面持ちの少年、ジェイド。

そしてフロルさんに手を引かれ、ゆるやかな癖毛の銀髪を揺らしながらリエンが姿を現す。ま

だ小さなリエンは父と俺を見ると、フロルさんのうしろに隠れてしまう。

「フロル。長旅で疲れただろう。ジェイドとリエンも、遠いところからよく来てくれたね」

父はフロルさんたちに近づき、ジェイドとリエンの頭を撫でる。

こんなところで立ち話もなんだからと、父は三人を屋敷の中へ招き入れた。

談話室でフロルさんたちと向かい合うように並び、父が三人の紹介をはじめ。

「シャルル。こちらがお前の継母になるフロル。そして義弟のジェイドとリエンだ」

父の紹介が終わると、三人の視線が俺に集まり、硬直してしまう。

一度目の人生で三人にしてきた仕打ちが脳裏に浮かぶ。

かつて、俺を見る彼らの瞳は怒りや悲しみに満ちたものばかりだった。

だが、今は違う。

三人は一度目で初めて出会った時と同じように、期待と不安が入り混じった目で俺を見ていた。

『侯爵家の地位目当ての卑しいやつらと家族になんて……俺は絶対に嫌です』

そう言って三人を拒絶した場面を思い出し、胸がぐっと締めつけられる。

俺は、もう二度と同じ間違いは犯さない。

「シャルルです。よろしく、お願いします……」

緊張しながら挨拶をして頭を下げると、フロルさんは今まで聞いたことがないほど嬉しそうな声で答えた。

「シャルルさん、初めまして！こちらこそよろしくお願いしますね」

花が咲いたように微笑むフロルさんを見て、驚いた。

一度目では、俺の機嫌をうかがうようなぎこちない笑顔しか見たことがなかった。

……いや、俺がそうさせていたんだ。

フロルさんのあとに続くように、ジェイドが一步前に出て会釈をする。

「シャルル兄さん、初めまして。ジェイドと申します。よろしくお願いします」

ジェイドはアメジストの瞳をまっすぐ俺に向け、礼儀正しく挨拶した。それからフロルさんのうしろに隠れたままのリエンに視線を送る。

「リ、リエンです。よろしく……お願いします」

顔を隠しながら、ボソボソと呟くようにリエンが挨拶する。そういえば、出会った頃のリエンは人見知りの怖がりで、屋敷でもずっとジェイドのうしろをついてまわっていた。一度目の記憶を思い出しながら、俺は三人に再度挨拶をする。

「こちらこそ、よろしくお願いします」

一度目の俺を知らない三人は、緊張が解けたように安心した表情になった。

父は隣で嬉しそうに微笑みながら、俺に言った。

「シャルル。フロルのことは『母様』と呼んでいいんだぞ」

投げかけられた言葉に、俺はどう反応していいのかわからず言葉を詰まらせる。一度目の人生でフロルさんを毛嫌いしていた俺は、彼女の名前すら呼んだことがない。それなのに、いきなり『母様』だなんて……

一度目のことを思い出し、困惑からうつむく俺に、フロルさんは優しく口を開いた。

「シャルルさん。無理に『母様』だなんて、呼ばなくていいんですよ」

「え……？」

顔を上げると、フロルさんは柔らかに微笑んだ。

「シャルルさんにとって、亡くなられたお母様はきつととても大事な存在だったでしょう。『母』という言葉は、すごく大切なものですから、私のことは、シャルルさんの好きなように呼んでくださればいいんです」

フロルさんは怒った様子もなく、ただただ笑いかけてくれる。死んだ母のことを尊重し、自分のことは二の次でいいというような言葉に、胸が締めつけられた。

こんな優しい人に、俺はなんてひどいことをしてしまったんだ……

後悔とともに目頭が熱くなり、泣いてはいけないと思うほど、涙が込み上げてきた。

「くっ……ぐす……」

「シャルルさん!？」

「シャルル?」

俺の異変に気づいたフロルさんと父が慌てている。罪悪感と後悔と不安……。言葉では表せない感情が溢れ出すように涙がこぼれた。

——二度目の人生をやり直す大事な場面で、俺はなにをやっているんだ……止まらない涙をシャツの袖で拭うと、震える俺の手に小さな手が重なる。

「シャルル兄さん。大丈夫ですか？」

涙で滲む視界に入ってきたのは、吸い込まれそうな深い紫色の瞳。ジェイドが、俺の手を握り心配そうに見上げてくる。

「……シャルル兄様」

ジェイドの背中に隠れてはいるが、リエンも心配そうだ。出会ったばかりの二人が、俺のことを心配してくれるなんて、驚きのあまり涙が止まった。

「シャルル、大丈夫か？」

「私がお母様の話をしたから、思い出させてしまったのね……ごめんなさい、シャルルさん」

父は俺の頭をポンと撫で、フロルさんはなにも悪くないのに謝った。

ジェイドは俺の手をずっと握ってくれて、その温もりがじんわりと俺の胸まで温かくしてくれる。ああ、早くみんなに謝らないと……

「ごめんな……さい」

一度目で言えなかった謝罪の言葉を、俺はようやく伝えることができた。

そのせいで気がゆるみ、また涙が溢れる。みんなは、俺が泣きやむまでずっとそばにいてくれた。俺が泣き止んだあと、三人を歓迎するために準備した豪華な夕食を『新しい家族』で初めて囲んだ。初対面で泣き出すという醜態を晒した俺は、挽回すべく必死になって盛り上げようとした。

空まわり気味の俺をフロルするように、フロルさんが相槌を打ち、話を広げてくれ、初めての食事は笑顔に包まれたものになった。

夕食をすませると、緊張の連続だった一日がようやく終わる。

一人部屋に戻り、大きなため息とともにベッドになだれ込んだ。

「最初から失敗しすぎだろお」

泣いてしまった場面を思い出し、枕に顔を埋める。ただ三人に謝ればいいと思っただけに、シヨックが大きい。

そして三人の優しさに触れ、俺の後悔は大きくなった。

一度目も、俺が少しでも三人を受け入れていれば、あんな結末をたどることはなかったはずだ……

神様が与えてくれた二度目の人生を失敗するわけにはいかない。

そのために、まずは三人のことを知っていく必要がある。

そして、三人が不自由なく生活していけるようにとにかく頑張らないと。

それは一度目で俺が三人に犯してしまった過ちの償いでもあるのだから……

「明日から、頑張るぞ」

こうして俺は、一度目とはまったく違う、二度目の人生を歩むことになった。

三人との良好な関係を築くにあたって、まずは日々の挨拶からはじめた。

なんてことない挨拶も、意識するとなんだか気恥ずかしい。

特に継母のフロルさんが相手だと緊張する。

朝、ダイニングに向かうと、フロルさんが使用人と一緒に食卓の準備をしていた。俺と目が合うと、柔らかに微笑んでくれる。

「フロルさん。おはようございます」

「おはようございます、シャルルさん」

初めて名前を呼んでみたが、なんだかむず痒くてすぐに顔をそらしてしまった。

フロルさんは嬉しそうにしていたので、これでよかったのだろう。

遅れてダイニングへやってきたジェイドとリエンにも「おはよう」と、緊張しながら声をかけた。ジェイドは礼儀正しく挨拶を返してくれるが、リエンは俺を見るとパッと目をそらし、フロルさんのほうへ走っていく。

「あ、こちらリエン！ シャルル兄さんにちゃんと挨拶しないか！」

リエンの行動をジェイドが叱る。

「大丈夫だよ、ジェイド。リエンはまだ、俺に慣れていないんだからさ」

そう言っただけでリエンを見ると、フロルさんにしがみつきの様子でうかがっていた。とはいえ、やはり挨拶をして返事がないのは悲しい。

しかし、一度目の俺はそれ以上のひどいことをしていたのだから、三人はもっと傷ついたらはずだ。

「一度目のみんなはずっとこんな気持ちだったんだな……」

ポツリと呟く。だが、挨拶がなかっただけで悲しんでいる場合ではない。

俺は気持ちを切り替えて、みんなと朝食を囲んだ。

それから毎日リエンに挨拶したが、やはり返事はなく、フロルさんやジェイドの影に隠れてしまう。しかし、少しずつだが俺と目を合わせる時間が長くなってきたような気がする。

挨拶の仕方を変えたら、リエンは返事してくれるだろうか？

そう思い、その日の朝は思い切っただけでリエンと目が合うようにしゃがんで挨拶してみた。

「リエン。おはよう」

「おはよう……ございます……」

驚かせてしまったようだが、初めてリエンが挨拶を返してくれた。

それが嬉しくて、思わず笑顔になる。

「あら、やっとシャルルお兄さんに挨拶できたのね」

「……うん」

フロルさんの言葉に、リエンも嬉しそうに微笑む。

一度目の時はいつも泣いていたリエンが笑顔を見せてくれて、ホッとする。

今日もあの頃とは違う一歩を踏み出したことに安堵するが、俺がやるべきことは山積みで、気は抜けない。特に、まだ幼いリエンは気にかけてやらないと、いつ泣き出すかわからない。

できるだけそばにいて、声をかけてやって……。それからなにをすれば、リエンは俺のことを嫌わずにいてくれるだろうか？

義弟たちが来てから、いつも顔をうかがうようにそんなことを考えてしまう。嫌われたあとの未来を知っているため、小さな頃のリエンですら俺にとっては恐ろしい。

一度目の人生で最後に見たジェイドとリエンの顔は、思い出すだけで背筋が凍る。心の奥底にある二人への恐怖を隠しながら、俺は精一杯笑った。

それから、互いの距離を縮めるように声をかけ続け、リエンは少しずつ心を開いてくれるようになった。懐きはじめたリエンは、俺のところに自らやってくるようになった。両手を広げ、柔らかな銀髪を揺らし、満面の笑みでこちらに駆け寄ってくる姿はなんとも可愛らしい。

学園の授業が早く終わった日は、リエンの部屋を訪れる。

ドアをノックし、部屋に入ると、退屈そうに使用人と遊ぶリエンの姿が目に入る。

「リエン、ただいま」

「シャルル兄様！ どうしたの？ 学園は？」

「今日の授業は午前中で終わったから、リエンと遊ぼうかなと思って」

俺の姿を見た瞬間、リエンはパツと顔を明るくした。そして駆け寄り、抱きついてくる。

「ハハ、リエンは元気だなあ。今日はフロルさんも出かけているから、退屈だったよね。なにかしたいことはある？」

「んー、お散歩に行きたい！」

「ああ、いいよ。じゃあ行こうか」

「わーい！ シャルル兄様、大好き！」

満面の笑みを浮かべるリエンに手を差し出すと、小さな手で俺の手をつかんでくれる。こんなにも小さなリエンに、一度目の俺は怒りをぶつけて怖い思いをさせていたかと思うと、罪悪感がドツ

と押し寄せた。

それをうち消すように、俺はリエンの求める『優しい兄』を演じ続けた。

このまま平穏に過ごしていけば、俺の人生の結末も少しはマシになるのだろうか。

リエンたちと仲よくなって、それから俺はどんな未来をたどるのだろう。

未来に不安を抱きながらも、新しい家族と穏やかな日々を過ごしていく。

だが、二度目の人生も決して平穏なばかりではなかった。

その日、俺が学園から帰ると、屋敷は慌ただしい雰囲気包まれていた。

使用人たちがリエンの名前を呼び、フロルさんとジェイドも心配そうに屋敷の中を歩きまわっている。

「フロルさん。一体どうしたんですか？」

「シャルルさん。実は、リエンが見当たらず……」

「え？ リエンが？」

「そうなんです、兄さん。母上と私が帰ってきた時、部屋にリエンの姿がなく……使用人と遊んでいたそうなんです、目を離れた隙にどこかへ行ってしまったようです」

二人の不安そうな表情を見た瞬間、脳裏に一度目の記憶が蘇った。

一度目の俺は泣き虫のリエンが気に入らず、部屋に閉じ込めた。そしてリエンがいなことに気づいた継母やジェイドの慌てふためく姿を陰で見ながら笑っていた。

——今回はなにもしていないのに、一度目と似た出来事が起こっている……？

俺は怖くなり、ぎゅっと拳を握りしめた。

「俺も、リエンを捜すの手伝うよ」

「ありがとうございます、兄さん。屋敷の東側はみんなで捜したので、西側を捜しましょう」
「わかった」

ジェイドとともに屋敷の西側を捜してまわるが、リエンは見つからない。

時間だけが過ぎていき、辺りはすっかり暗くなった。

——リエン、一体どこに行ってしまったんだ。

屋敷の中をジェイドとともに歩きまわり、ふと使用人の休憩室の前で足を止めた。中からは、使用人たちの楽しそうな声が聞こえてくる。

「はあ……、あのクソガキどこ行っただよ。子守りなんてやってられないっての」

「お前がおどかすからだぞ。まあ、お前に手を上げられたら、大人の俺でもビビって逃げ出すがな。けど、あのガキの態度には俺も苛ついてたから、大人に逆らっちゃいけねえって思い知っただろ。それにしても、いい加減捜すフリするのは疲れたぜ。あんなガキ一人いなくなったところで、こんなに大騒ぎすることじゃないよなあ」

「ほんとだぜ。そもそも子爵風情が侯爵家に入り込むなんて、身のほどを知らないよな。どうせ母親も体で侯爵をたらしこんだんだろ？ 見てくれはいいいからな」

「なあ、あのクソガキも顔はいいじゃん？ 一発やっちゃえば俺たちに逆らえないんじゃないか？」

「げっ。お前の許容範囲の広さにはいつも驚くけど、あんなガキまでいけるのかよ」

ゲラゲラと使用人たちの品のない笑い声が響き、そばにいたジェイドは怒りで顔をゆがめている。俺自身も怒りが込み上げるのを感じた。

「お前たち。今話していたことは本当か」

「シャ、シャルル様……」

乱暴にドアを開けて中に入ると、俺の姿を見た使用人の男たちは顔を青くする。

「本当かと聞いているんだ。リエンに手を上げたのか」

「ち、違います！ ただの冗談です！ リエン様に手を上げるなど滅相もない！」

「冗談だとしても、そんな考えを持つような者をこの屋敷に置いておくことはできない。今すぐ荷物をもとめて出ていけ」

「そ、そんな！ シャルル様、どうかお許しを！」

「私たちは長年侯爵家に仕えてきたんですよ！」

「二度も同じことを言わせるな。お前たちと顔を合わせるのはいで最後だ」

許しを求める使用人を睨みつけ部屋の扉を閉めると、廊下で待っていたジェイドと目が合う。

「ごめん、ジェイド。嫌な思いをさせてしまって……」

「いえ、私は大丈夫です。シャルル兄さん、リエンのことで怒ってくださって、ありがとうございます。でも、よかったですか？ あの使用人たちは、長年ウォールマン家に仕えていた大切な使用人なんじゃ……」

ジェイドは申し訳なさそうに俺を見つめる。

「俺にとって大切なのは、ジェイドとリエンのほうだよ。二人は大切な家族だからね」

無理な笑顔でついた嘘を、ジェイドは俺の本心だと思ったのか、安心したように微笑む。

ジェイドやリエンに優しくするのは、罪悪感からだ。それに、二人に対する恐怖も消えたわけではない。

だからそんな表情を見せられると胸が痛むが……今はリエンを捜すのが先だ。

「さあ、早くリエンを捜しに行こう」

申し訳ない気持ちを隠したまま、再びリエンを捜しに行く。だが、一向に見つからず、屋敷の中は捜し尽くしてしまった。

「シャルル兄さん。リエンは使用人に怯えて、外に出ていったんじゃないでしょうか？」

「そんなはずは……」

リエンはとても怖がりで、フロルさんやジェイドがいないと外に出ることはなかった。一度目の時も、遊んでやると言って無理矢理外に連れ出した時に大泣きされて、それで頭にきた俺はリエンを……

「もしかして……」

俺はある場所のことを思い出し、走り出す。

向かうのは、屋敷の東側にある物置部屋だ。

「シャルル兄さん、そこはもう調べて……」

「いや、きっとここなんだ」

部屋に入ると、埃が舞う。薄暗い部屋の奥にある壁は一見普通の壁だが、実は隠し扉がついている。そして、一度目の俺はそこに泣きじゃくるリエンを閉じ込めた。

一度目と同じようにその扉を開けると、奥にうずくまる小さな人影が見える。そして、目に涙をいっぱい溜めたリエンがこちらを振り向いた。

「リエン……見つけた」

俺の声にリエンはくしゃりと顔をゆがませる。

「にいさま……」

「リエン、どうしたの？ みんなが心配してるよ？」

「にいさまあ、しゃるるにいしやまあ……」

リエンは目に溜めていた涙をポロポロとこぼし、こちらへ手を伸ばしてくる。その手を取り、小さな体を抱き上げ、抱きしめてやる。

「リエン。なにか怖いことがあったの？」

「にいしやま……あ、あのね……」

リエンは泣きながら、使用人にされたことや、これまでも使用人からひどい言葉をぶつけられていたことを話してくれた。

リエンの話をすべて聞いてやると、流れていた涙がようやく止まる。

「もう大丈夫だよ。俺が、リエンのことをちゃんと守るから」

「シャルル兄様、僕を守ってくれるの？」

「うん。もうリエンに辛い思いはさせない。だから、みんなのところに帰ろう？」

「……うん」

リエンは涙を拭い、コクリとうなずく。リエンを抱っこしたまま部屋を出ると、外で待っていたジェイドが駆け寄ってきた。

「リエン。なにも言わずにいなくなったらダメだろ？ 母上もシャルル兄さんも、心配してたぞ」

「ごめんなしやい……」

「私も、シャルル兄さんと一緒にリエンを守るから」

その言葉に、リエンは涙を浮かべて嬉しそうに微笑み、ようやくジェイドにも笑顔が戻る。

三人でフロルさんの部屋に戻ると、リエンはまた泣き出して、フロルさんに駆け寄った。フロルさんも涙をこらえながら、安心したようにリエンを抱きしめていた。

リエンの話で名前が上がった使用人たちは、後日、父が直接処分を下し、その大半が屋敷を去ることになった。それから残った使用人たちはジェイドやリエンへの態度を改めるようになり、その後リエンが泣くことはなくなった。

あの事件以降、リエンの笑顔は増え、今日も一緒に遊んでいる。

最近のリエンのお気に入り、隠れんぼだ。

リエンはいつも上手に隠れるので探すのが大変だが、見つけた時には嬉しそうに笑う。

どうやら見つけてもらうのが楽しいらしい。

「リエンは……ここかな？」

ダイニングのカーテンに膨らみを見つけてそとめくると、笑顔のリエンが現れた。

「リエン、みーつけた」

「エへへ。また見つかった」

リエンはそう言って抱きつき、俺の胸元に顔を埋める。柔らかな銀髪を撫でてやると、嬉しそうにこちらを見上げた。

「シャルル兄様は、僕がどこにいたって見つけてくれるね！」

「そうかな？ リエンは隠れるのが上手だから、今日も探すのに時間がかかったよ」

「そんなことないよ。僕を見つけてくれるのは、シャルル兄様だから……」

リエンはまた俺の胸元に顔を埋め、ぎゅっと抱きついてくる。

一度目では知ることのなかった、リエンの甘えん坊で可愛い一面を知り、リエンに対する恐怖がうすらいだ気がした。

ジェイドとリエンが屋敷に来て二ヶ月が経ち、ジェイドが初めて学園に通う日を迎えた。

俺と同じ紺色のブレザーに袖を通したジェイドは、鏡を見ながら自分の制服姿を確認している。

「ジェイド、ネクタイをつけないと」

学年カラーである白と黒のストライプのネクタイを手渡すと、ジェイドはそれを持ったまま、

困ったように立ちつくす。

「どうした？」

「あの……ネクタイの結び方がわからなくて。教えてもらえないでしょうか」

「これまで教わらなかったのか？ ネクタイは崩れることもあるから、自分で結べないと先々困るぞ」

「……すみません。そういったことを教わる前に、父が亡くなってしまったので……」

俺の疑問に、ジェイドは申し訳なさそうに答える。その言葉で、俺は失言に気づき、慌てて謝った。

「あ、ごめん……」

「いえ、大丈夫です」

ジェイドはぎこちなく笑ってくれるが、俺は申し訳ない気持ちでいっぱいになる。

俺も母と……そして、一度目では父とも死に別れ、肉親を失う辛さは痛いほどにわかる。

さっきの失言を挽回するためにも、ネクタイの結び方くらい俺が教えてやらないと。

「俺が教えるよ。ジェイドのお父上ほどうまくはないけれど、それでもいいかな？」

「いいんですか、兄さん？」

「うん。でも、うまくはないからね。俺のだって、少しゆがんでるしさ」

「そんなことないですよ。じゃあ、兄さん。よろしくお願いします」

ジェイドにネクタイを手渡され、俺は緊張しながらネクタイを結んでいく。教えるとは言ったも

の、俺もネクタイを結ぶのは苦手で、一度目の人生では大人になっても使用人に結んでもらっていたので偉そうにはできない。

「えっと……どうかな？」

思ったよりも上手に結べたが、やはり少しゆがんでいる気がする。ジェイドは完成した自分の姿を鏡で見ながら、満足そうに口角を上げる。

「ありがとうございます、シャルル兄さん。また明日も教えてくれますか？」

「ああ、もちろん」

俺の心配をよそに、ジェイドは嬉しそうだったので、まあこれでよかったのだろう。

準備を終えると、ジェイドとともに馬車へ乗り込み、俺たちが通うリベルテ学園へ向かう。

リベルテ学園は貴族の息子が主に通う学園だ。自由な校風が売りで、貴族同士の交流を目的とする者もいれば、勉学に励む者もいる。

一度目の時もジェイドと同じ馬車で初登校したが、俺は終始不機嫌な態度で、馬車の中は気まずい空気が流れていた。

けれど、今度はそんな間違いは起こさない。

ジェイドに嫌われないためにも、義兄としてサポートしてやらないと。

気を引き締め、ジェイドに積極的に話しかけて知りたいことを聞いてはいろいろと教えてやる。学園の建物が見えてくると、ジェイドは目を見開いた。

リベルテ学園の校舎は歴史ある建物として有名だ。ここに八歳から十六歳までの子供が通って

る。俺も初めて学園に来た時は、その大きさと威厳のある雰囲気（いげん）に驚き、怖いとさえ思った。

「ジェイド。学園は広くて迷いやすいから、俺が案内するよ」

「ありがとうございます」

馬車を降りて声をかけると、ジェイドは嬉しそうに俺のうしろについてくる。途中、クラスメイトに声をかけられたので「大切な義弟のジェイドだ。仲よくしてやってくれ」とジェイドを紹介する。

『大切な義弟』なんて大袈裟（おおげさ）かもしれないが、学園は小さな貴族社会だ。今は再婚して侯爵家の一員となったジェイドだが、中には「元は子爵のくせに生意気な」と、一度目の俺のように嫌味を言ってくるやつもいるだろう。

俺が『義弟を大切にしている』とアピールすれば、そういうトラブルも少なくなりジェイドの学園生活も一度目よりは楽しいものになるかもしれない。

それに、俺がジェイドのことを嫌っていないことを知ってもらうためにも、このくらいがちょうどいい。

ジェイドははにかみながらも、いつものように立派に挨拶（あいさつ）をしていた。

それから始業の鐘が鳴るまでジェイドを引き連れ、教室の場所や図書室、食堂などを案内し、最後に俺のお気に入りの場所へ連れていった。

校舎の裏側にある、手入れの行き届いた広い園庭の右奥には、小さな林がある。林の小道を進んでいくと、ポツカリと開けた野原のような場所にたどりつく。

そこには二人がけの小さなベンチが置いてあり、一息つくには最高の場所だ。

「わあ、すごく素敵な場所ですね」

「そうだろ？　ここは父様がこの学園に通ってた頃からあつたみたいで、学園に入学する前日に教えてもらったんだ。サボるのにもってこいの場所があるぞって」

ベンチに腰かけ手招きすると、ジェイドは俺の隣に座った。

風の音や木々のざわめきを聞いていると、嫌なことを忘れられる。

一度目の時は、辛い時よくここに一人で来ていたことを思い出し、胸がクツと痛んだ。

「シャルル兄さんも、ここで授業をサボっているんですか？」

ジェイドの意外な質問に、思わずクスツと笑う。

「たまにね。辛くて苦しくてどうしようもない時には、ここに来てボーッと空を眺（なが）めてる」

「シャルル兄さんは、今も辛いことや苦しいことがあるんですか？」

緊張した面持ちで、ジェイドが俺を見つめる。

陽の光に照らされたアメジストの瞳が輝くが、俺はその色にまだ慣れない。

綺麗と思うよりも恐怖が強くて、視線をそらしながら返事をする。

「……そんなことない。今はフロルさんやジェイドとリエンがいるから……俺は幸せだよ。それに、ジェイドとこうやって一緒にこの場所に來られたのが嬉しいし、な？」

するとジェイドは安堵（あんど）したように微笑んだ。その表情に、胸が痛む。

『幸せ』と言ったが、それは本心ではない。

一度目の人生の記憶がつきまとい、義弟たちに嫌われまいと奮闘する毎日。ジェイドとリエンが本当の俺に気づけば、今回の人生も辛く苦しい結末を迎えるかもしれない。

そんな不安と恐怖を隠すように、俺は笑顔を作る。

ジェイドはこの場所を気に入ったのか、終始笑顔だった。二人でベンチに座り、話をする。予鈴が聞こえたら、ジェイドを職員室まで送り、俺の役目は終わる。

ジェイドに「頑張つてな」と声をかけて職員室を出ると、ハア……とため息が漏れた。

これからはジェイドを陰ながら見守り、傷つけようとするやつが現れたら牽制していかなくちやならない。ジェイドが笑って過ごすためになをすればいいか、考えだすとキリがない。だが、なにが原因でまた義弟たちに嫌われてしまうかわからない今、俺はできる限りのことをやるしかない。「ひとつずつやっていくしかない……」

よし！ つと、気合いを入れ直し、俺は自分の教室へ向かった。

授業の終わる時間が違うので、俺は先に屋敷へ帰り着き、リエンのもとへ向かった。しばらくするとジェイドも帰ってきて、「おかえり」と声をかける。

「学園は楽しかった？」

「はい。とても楽しかったです。友達もできました」

「そっか。よかったね」

ジェイドの言葉にホッと胸を撫で下ろす。

「いいなあ。ジェイド兄様、僕もみんなと一緒に学園に行きたい！」

「リエンも八歳になったら行こうな。その時は、シャルル兄さんに教えてもらった素敵な場所にも連れていってやるから」

「えっ！ 素敵な場所ってどんなところなの？」

「それは学園に入ってからのお楽しみだよ」

「楽しみ〜！」

リエンとジェイドは、楽しそうに未来の話をする。

——このままいけば、本当にそんな未来がやってくるのかもしれない……

義弟たちとともに仲よく学園に通う姿を想像して、俺は小さく口元をほころばせた。



三人と家族になり、早いもので二年が経つ。

相変わらず三人から『嫌われない』ことを心掛けながらの生活。

はじめは不安と恐怖に押し潰されそうだったが、三人と暮らしていく間に少しずつ変化していった。

俺が声をかければ笑い、遊んだり手伝いをすれば、感謝してくれる。

ジェイドやリエンは、俺が困っているとすぐにやってきて、俺のほうが助けてもらう場面もあつ

た。そうやってみんなと一緒に過ごしていると、一度目では見えなかった部分が見えてくる。

フロルさんは、明るくてとても優しい。人の気持ちに寄り添い、苦しむ人に手を差し伸べてくれる。きつと一度目の俺も、フロルさんには苦しんでいるように見えたのかもしれない。

ジェイドは真面目で頑張り屋の優等生だ。口数は少なく常に冷静に物事を見ている。俺なんかやりずつと大人で、困った時にはジェイドに意見をもらうこともある。

学園での成績は常にトップ。一度目の俺はジェイドと自分を比較し劣等感に駆られていたが、比較すること自体が間違っていた。

ジェイドの成績は努力の賜物だ。なにもしていない俺が敵うはずがない。そんなジェイドだが、甘いものが大好きという子供らしい部分もある。本人は隠しているようだが、甘いものを口にする和无意識に微笑む可愛い癖がある。あまりに可愛いので、たまにお菓子を持っていき、二人でお茶会をしている。

人見知りだったリエンは少しずつ成長し、初対面の人にも挨拶ができるようになり、泣くことも少なくなった。七歳になった今も甘えん坊なところは変わらずで、手を繋いで散歩をしたり、本を読む時にはピッタリと横にくっついていたりしてくる。

以前はジェイドのうしろにひっついていていたが、今は俺の近くにすることがほとんどだ。ジェイドと仲が悪いわけではなさそうだが、今の俺は少し戸惑ったりもする。

そして、平和な我が家の一日が今日もはじまる。

「兄さん。勉強でわからないところがあるんですが、教えてもらえませんか？」

「ああ、いいぞ」

十歳になったジェイドは相変わらず真面目で、わからないことがあるとやってくる。

昔の記憶も駆使しながら、俺はジェイドの持ってきた課題と向き合った。

「えーっと、ここは、この方程式をあてはめて……そして、ん……」

今日は俺の苦手な数学。ジェイドが解いているのは高学年でも難しい問題で、俺はジェイドに教えながら頭をひねっていた。ああでもないこうでもないと思っていると、ジェイドが突然スラスラとペンを走らせる。

「兄さん、こうですか？」

「あ、うん！ そうそう！」

「なるほど。さすがシャルル兄さん。とてもわかりやすかったです」

「俺は少ししか助言していないから、ジェイドが自分で解いたようなものだろう？」

ジェイドは褒めてくれるが、はつきり言っただけの助言はあまり役に立っていない。ほとんどジェイドの実力だ。

「いえ、私一人では解けませんでした。シャルル兄さんのおかげです」

「そんなことない。ジェイドが努力した成果だよ」

俺の言葉に、ジェイドが口元をほころばせる。

「あの、兄さん。今日は……頭を撫でてくれないんですか？」

「そうだった。ジェイド、よくできました」

頭を撫でると、ジェイドははにかむように笑う。一度目の人生で、そんな顔は見たことがなかった。いつも冷たい表情のジェイドが自分を蔑んでいるように思えて、劣等感の塊だった俺は暴言を吐いていた。

あの時の自分が今のジェイドの笑顔を見たら、驚くだろうな……

「そういえば、新作のクッキーを焼いたんだ。あとで持ってくるね」

「はい！ 楽しみにしています」

お菓子の話をする、ジェイドは花が咲いたような笑顔になった。

勉強会が終わり部屋を出ると、リエンが「シャルル兄様〜！」とうしろから抱きついてきた。

「今日も元気だね、リエン。どうしたの？」

「ジェイド兄様との勉強は終わり？ 終わったなら、僕と遊んでほしいなって思ってる！」

「ああ、いいよ。今日はなにをして遊ぼうか？」

「ん〜、本を読んでほしいなあ！」

「リエンは本当に本が好きだね」

リエンの部屋に入ると、リエンは好きな本を持ってきて俺の膝に座る。

「じゃあ、今日のお話は……って、また難しい本を持ってきたね。『人間社会における平等と不平等』か……。こんな難しい本を読んで楽しいの？」

「うん！ 楽しいよ！」

「そ、そっか。まあ、楽しければなんでもいいか」

リエンにねだられなければ、俺の人生でこんな本を読むことはなかったかもしれない。そんなことを思いながら、俺は声に出して本を読んだ。

「じゃあ読むよ。『今私たちが生きている世界で、平等な生活を送れていると感じる人は……』」

難しい言葉や文字ばかりが並ぶ本を十五分ほど読み進め……ダメだ。話が難しすぎて眠たい。

強烈な睡魔が俺を襲う。

「現代における……現代に……」

「兄様、そこを読むのもう四回目だよ？」

リエンにクスクスと笑われ、恥ずかしくなりながら気を引き締めて再度本と向き合う。だが、難しい言いまわしや、何度も『平等』だの『不平等』だのと、まるで同じことを繰り返しているような内容で、頭がパンクしそうだった。リエンは内容を理解しているのか、うんうんとうなずいている。

リエンを満足させようと必死に目を開けて読み続けるが、文字はゆらゆらと揺れ、頭の中で『平等』『不平等』がぐるぐるまわる。

リエンが俺を起こそうと声をかけてくれるが、なんとか「うん……」と答えながら、いつの間にか睡魔の誘惑に負けていた。

……すっかり寝こけてしまった俺は、温かなものに包まれる感覚で目を覚ます。胸元はずっしり重く、俺に抱きつくようにリエンが眠っていた。いつの間にかジェイドも来ていたようで、俺の肩に寄りかかりやすやすと眠っている。

小さな寝息と、無防備な二人の寝顔はとても可愛い。

一度目の人生にはなかった穏やかな時間と温もりを感じながら、俺は再び目を閉じたのだった。



それから月日は流れ、十三歳の春を迎えた。

リエンも八歳になり、心待ちにしていた学園生活に胸を躍らせていた。

「シャルル兄様！ 学園についたら、一番に兄様のお気に入り場所に連れて行ってね！」

「ああ、わかったよ。ほら、リエン。シャツのボタンは上まで留めないと」

「えー。上までボタンを留めると息苦しいから、好きじゃないなあ」

「リエン。兄さんを困らせるようなことを言うんじゃない」

ボタンを留めるのを嫌がるリエンに、ジェイドは普段よりも厳しい顔を見せる。

「ハハ。気にしないでいいよ、ジェイド。でも、ネクタイをつけるならボタンはしっかり留めたほうが、俺は格好いいと思うけどなあ」

「そう？ じゃあ、シャルル兄様がボタンを留めてくれる？」

「ああ、いいよ」

リエンの機嫌をうかがいながらボタンを留めていくと、胸元にチラリと銀色のチェーンが見える。
——これって、あの時のペンダントだよな……

見覚えのあるそれに、俺は気まずい気分になった。

一度目の記憶が蘇りそうになった時、「シャルル兄様？」という声が出て、ハッとす。

「ごめん、ボーッとしてたみたいだ」

「突然手を止めたから、なにかあったのかと思ったよ。ねえ、シャルル兄様。ネクタイも結んでくれる？」

「構わないよ」

「やったあー！」

嬉しそうに跳ねるリエン。

準備が終わると、少し早いが学園へ向かう。三人で馬車に乗り込むと、リエンは俺の隣に座り、窓の外を見ながらいろんな質問をしてきた。

学園に到着すると、ジェイドの時と同じように時間が許すまで案内した。そして園庭の奥にある秘密の場所へ連れていくと、リエンは嬉しそうに表情をほころばせる。

「すつごく素敵な場所だね！」

「そうだろ？ ジェイドも初めてきた時、同じように喜んでいたよな」

「そうですね。なんだか懐かしく感じます」

ジェイドとリエンは、楽しそうにしている。

二度目の世界がはじまってから三年。

まさか義弟たちと、こんなに仲のいい兄弟になるなど想像がつかなかった。このままの関係を続

けていけば、俺が嫌われることはなさそうだ。

それに、二人を『大切にしたい』という気持ちも少しずつ芽生えてきた。

自分の心の小さな変化を感じながら、俺は義弟たちと楽しい時間を過ごしていった。

リエンの初登校から一ヶ月が過ぎた頃。

自分の部屋へ戻ろうと廊下を歩いていると、キラリと光る物を見つけた。

「あ、これは……」

落ちていたのは、チェーンが切れた銀色のロケットペンダント。チャームを開くと、中には一人の男性の写真が入っている。

その男性は、リエンとよく似ていた。

「リエンのペンダントだな」

リエンは二歳の時に死んでしまった父親のことを忘れないようにと、ペンダントに写真を入れてずっと首に下げていた。

このペンダントは、フロルさんが亡くなった旦那さんからプレゼントされた思い出の品でもある。一度目の俺は、リエンのペンダントが落ちているのを見つけて隠し持ち、泣きそうな顔で必死に探すリエンを見て、ほくそ笑んでいた。最後はリエンを近くの湖に連れ出し、目の前で湖へ投げ捨てた。リエンはペンダントを拾いに湖へ入っていき、後をついてきたジェイドが必死に止めていた。深い湖の底に沈んだペンダントが見つかるはずもなく、リエンはずぶ濡れになりながら泣きじゃ

立ち読みサンプル はここまで

くり、ジェイドも辛そうな顔でリエンを慰めていた。

俺はそんな二人を見ながら、ケタケタと笑っていた。

相変わらず最低で最悪な自分の行為を思い出し、ため息が漏れる。

「早く返してやらないと」

ペンダントを手にしてリエンの部屋へ向かうが、リエンの姿は見当たらない。屋敷の中を捜している、不安な顔でキョロキョロするリエンの姿が目に入った。

「リエン」

「シャルル兄様……」

俺の顔を見ると、リエンは顔をくしゃりとゆがめ、今にも泣き出しそうになる。

「探し物は、これだろ？」

ペンダントを見せると、リエンは安心したように眉を下げてペンダントを受け取った。

「ありがとう、兄様」

ペンダントをギュッと握り締めながら、リエンはいつもの可愛らしい笑顔を見せる。

「チェーンが切れているから、直してもらおうか？」

「大丈夫。このまま持っているから」

「そうか。もう落とさないように気をつけるんだぞ」

「うん！」

嬉しそうにペンダントを見ていたリエンは、ポツリと意外な言葉を呟いた。